

京都大学人文科学研究所共同研究最終報告書

1. 研究課題

中国在家の教理と経典

Buddhist Sutras and Doctrines for Chinese Laity

2. 研究代表者氏名

船山 徹

Funayama Toru

3. 研究期間

2016年04月 - 2020年03月(4年度目)

4. 研究目的

四～七世紀頃の中国(劉宋・南齊・梁・陳・隋・唐)で仏教は様々な発展を遂げた。出家僧だけでなく文人等の在家信者が果たした役割も大きかった。出家者が学んだ経典や論書は現在の大蔵経の全貌を理解することから知られるが、一方、在家者の仏教知識がどの程度のもだったか、それは出家社の理解と相違する点があったのか、在家者に共通の得手不得手があったか等の問いに答えることは予想以上に難しく、現在に至るまで確かな答えは得られていない。人文研ではかつて六朝隋唐時代の知識人や庶民の仏教を知るため、『肇論』『弘明集』等の会読が行われた。本研究班はその流れを継承しながら、多くの在家仏教徒の著作を収める道宣『広弘明集』(7世紀)を主な素材として、中国在家仏教の実態解明を目指す。

Various developments of Chinese Buddhism achieved during the 4th/7th centuries were led by not only monastics but also laity such as emperors and literati. Contrary to our normal expectation, however, it is difficult to answer to such questions as "How should we evaluate the quality of lay understanding of Buddhist doctrine?" "Are there any likes and dislikes of sutras and expertise for the laity?" Inheriting the merits of research seminars on Chinese religion formerly conducted in this institute, the present research seminar aims at a careful reading of the Expanded Collection for Glorifying and Elucidating the Law (Guang hong ming ji, 7th c.) and the like in order to clarify a concrete picture of lay Buddhism.

5. 研究成果の概要

漢語大蔵経の中にあつて『広弘明集』は六朝隋唐の在家貴族信者の著作を含むため、一

一般的な意味での仏教研究では注目される度合いが低く、むしろ中国思想史において目覚ましい研究がなされてきた。本研究所においても過去に梁の僧祐撰『弘明集』と唐の道宣撰『広弘明集』を少しずつ読み、訳注を蓄積してきた事実がある。本研究班は、本研究所におけるこれまでの研究潮流を継承しながら、さらに発展させることを目的とした。具体的には、これまで原本を実見することのかなわなかった木版大蔵経諸本の重要な幾つかが最近十年ほどの間に公開され、出版されつつあることに鑑み、これまでは扱えなかった原典校勘が可能となった。本研究班の成果としても校勘を具体的かつ緻密に行い、既出版の原文をこれまで以上に訂正することができるようになったことは、近年の研究の大きな躍進である。『広弘明集』には出家僧の著作も多く含まれるが、「中国在家の教理と経典」と題する本研究班では、在家信者に含まれる王侯貴族による著作を特に集中して会読の対象とした。その結果、教理学の専門家である学僧が基にするのとは異なる種類の文献を踏まえて在家者の文献は編まれている事例があることを具体的に確かめることができた。その成果は、『東方學報』京都において研究班による訳注成果を順次公表するよう目下準備をすすめている。

6. 共同研究会に関連した公表実績

二〇二〇年十二月刊行予定『東方學報』京都九五冊に訳注の成果を一部出版した。

7. 研究成果公表計画および今後の展開等

研究班で解読し内容の確定した訳注稿を、順次、『東方學報』京都において出版公開する。まず第1回として『同』九五冊(二〇二〇年十二月刊行予定)に訳注を公表する。